

日 時：2019年11月11日(月)19時45分～20時30分

会 場：ふれあい歯科ごとう

参加者：五島、阿部、和泉、稲山、遠藤、栗原、齊藤、田口、堀尾、余郷、吉田、佐藤(惟)

テーマ：施設での看取りから考える～終末期における食事の意義と多職種協働～（報告者：稲山未来）

<報告内容>

Case1 「終末期だから、食べられないと思っている？」

■事例概要（Tさん 95歳男性）

アルツハイマー型認知症、慢性硬膜下血種（90歳頃） 妻は他界、子どもは4人、面会あり

■ADLの変化

XX年4月 病院より特養入所 5-8割摂取

8月下旬 腹部痛 食事量減少 0-2割⇒1週間後に意識レベル低下

9月初旬 声かけに開眼するも傾眠傾向 水分をゼリーで3口程度

9月下旬 点滴継続 水分をゼリーで100cc/1日 家族差し入れのプリン、水ようかん等

■ある日の昼食時間

Tさんの食事がそのまま下膳カートへ…食事を配膳していなかった。

CW「食事を食べられていないので食費がもったいない。食止めできませんか？」

栄「家族の差し入れは食べてますよね？」

CW「そうなんですけど、食事は食べられていない」

栄「…なんで？」 その後、悲しくて向き合えずそのフロアに行けなくなった。

⇒施設相談員が動いてくれた。「食止めはしません」「食事は部屋までもっていく」

■なぜこんなことがおきたのか…

1. 意識レベルが低下した時点で「食べられない」と判断、その後の状態変化に頭がついていかない。
2. 経口摂取による誤嚥や窒息が心配。
3. ユニット型特養で食事時間は職員が1名。ほかの職員も見ることがなく気付かない。
4. 記録上は口に入れて味わえたとしても「0割」となってしまう。
5. 食事の意義を伝えられていなかった。

■食事の意義

1. 栄養摂取がすべてではない
2. 食事の時間は誰しもが平等に与えられるべき時間

■食べられなくてもできること

1. 香りを感じること
2. 時間や季節の変化を感じる
3. 食事の輪に参加すること
4. 食事をきっかけに会話が生まれる

■その後の経過と振り返り

9月下旬 点滴継続 ⇒10月中旬 点滴抜去 ⇒3日後 ご逝去

ちゃんと寄り添ってくれる人もいた。改めて振り返ってみると施設職員は良いケアをしてれていた。

- ・ ご逝去2日前 問いかけに「こんにちは」「はあい」と発語
- ・ ご逝去前日…入浴してすっきり（シャワー浴）
- ・ 食事は少量ずつではあるが嗜好品や食事を口にする。最期まで口から食べることができていた。

Case2 「そんなにみんなで食べろと言わないで」

■事例概要（Mさん 93歳女性）

腰痛、変形性膝関節症、アルツハイマー型認知症、近所に一人娘がいるが、面会は少ない。

XX年7月 入所 当初の食事は常食10割

XX+2年 食欲不振…摂取量3-5割⇒フロアカンファレンスの開催

- ・ ご本人の意思を尊重し食形態は落とさない
- ・ お菓子、チーズ等を随時提供。水分はゼリーで
- ・ 家族への報告、食嗜好の確認
- ・ 舌ブラシによる口腔清掃

■ある日の昼食時間

CW「Mさん、こんにちは」→お気に入りのCWであったにもかかわらず本人泣き顔

CW「さあ食べましょうか」←（「今日もまた食べさせられるんだな…」という気持ちだったのでは）

■なぜこんなことが起きたのか

1. 食べてほしい、元気になってほしい職員の気持ち
2. 「家族から差し入れをもらってるから食べさせなきゃ」という義務感

■対応方法の変更

「無理して食べなくてよいよ」「今日は暖かいね」世間話から。

「全部残っていると娘さんが心配するからちょっとだけどう？」「一口食べてみる？」⇒「うん」

ちょっとずつ見せながらどれくらい食べられるか調整⇒粥3粒くらい

食べるというより本人の気持ちを支援する

■その後の経過

辛いことはやめよう、笑顔をみよう！

6月上旬 施設の庭でピクニック、お花見ドライブ、屋台で焼きそばを口に含む。

3日後 点滴実施（水分のみ200cc）⇒約1週間後 点滴漏れあり、抜去

6月下旬 声かけに反応なし、舌を湿らせる程度 ⇒家族、介護士の寄り添う中静かに息を引き取る。

娘「苦しまずに最期を迎えられるなんて十分。皆様に囲まれて幸せ」

お気に入りのCWも一緒にいる時だった。亡くなる瞬間に誰といるかは本人が決めていると思う。

お看取りの多い職員さんがいる。とても暖かい雰囲気の方。

■なぜ食べたくないのに食べたのか（想像）

- ・みんなが自分のために努力していることがわかっている。
- ・娘を少しでも安心させたい。⇒母親としての役割を最期までまっとうした。

■家族の思い

- ・できる事をやりつくした。本人も最後までがんばってくれた。後悔なし、ありがとうございました。
⇨ 栄養士としては…本人に頑張らせすぎたのではないか。

■食事を考える視点

①栄養補給 ②摂食機能 ③楽しみ←終末期はここが大きくなってくる

予後予測を立ててギアチェンジ「生命維持のための栄養補給」から「楽しみとしての食事」へ

■まとめ

食事の関わり方に正解はない。もっと試行錯誤すればよかったと反省することもある。

強く勧めすぎてつらい思いをさせてしまったこともある。

残される家族は誰かが一緒に悩み考えてくれることで支えられる。

<ディスカッション>

- ・ 2つの症例を出した意図は？ ⇒どれだけ食支援を進めるのか、引くのか。対極する例。
- ・ 特養の職員は全量食べさせるのが仕事、義務感みたいになってしまうところがある。年々そうじゃないとわかってくるが。そこにたどり着くまでには経験がいる。
- ・ ご家族も食事量に関して一喜一憂する。でもそうじゃないと伝えたい。
- ・ 生きるための必要なエネルギー、最終段階は減っていくとはいえ普通に考えたら家族の差し入れだけでは足りないが。「もったいない」となってしまうのはどうなのか…←CWも悪気はない。
- ・ 食事は美味しかったのか？⇒施設の食事は薄い…塩分控えても食べられなかったら意味がない。
- ・ 雰囲気作りで食べられる人もいる。末期がんで全然食べられなかった人が、JTBヘルパー付きの旅行で箱根へ行って向こうですごい食べた。雰囲気づくりはすごく大事。
- ・ 「生命維持のための栄養補給」から「楽しみとしての食事」へギアチェンジしたんだったら3食する必要がない。「何か食べたければ持っていきますよ」のほうが良い。1日3回持ってこられるのは苦痛だと思う。あの時間来ると嫌だなと思っていたかも。スルーした人はファインプレーだったかも。
- ・ 在宅でもギアチェンジはとても難しい。「ここで終わりですよ」っていうことだから。
- ・ ギアチェンジの判断はその人の「食べたい」という気持ちでは。
- ・ 提供する側の救われなさみみたいのも。「どうせ食べられないから何もやらない」はちょっと辛い…
- ・ 施設も病院も夕食17時。お昼12時で…運動もしていないしお腹がすかない。寝るのも早い。

- ・ 高齢者は普通に食べる総量の半分くらいで普通に生活している。老人用のボリュームのものが必要だと思うが…施設は老人の必要カロリー量で合わせているのか？
⇒おおよそ 260Kcal+おかず etc. 小食の人から見たら拷問かも…
- ・ 栄養入れても苦痛が長引くばかりでは…と、ここですばっとやめるか。施設の人は「ここでやめましょう」とは言えない。家族に言ってもらえない。
⇨家族は「私たち見ていないからいつも見てくれている施設の人にお任せします」となってしまう。
- ・ 5-10 人くらいの小規模だったら一人一人の生活スタイルに寄り添えるが、90 人くらいの施設だった。
- ・ だましまし食べているとそこから復活する人もいる。今があきらめ時なのか、わからない。
- ・ 寒くなって冬になると食べなくなるパターンがすごく多い。春になると復活する。いかに冬を乗り切るか。認知症の方も認知症でない方でも。原因がわからない。季節性のうつ？ 冬季うつ？
- ・ ご飯を食べられないからと言って食形態を落とすともっと食べられなくなってしまった。
- ・ 施設では職員の中の間人間関係とかもからんでくる。「自分をもっと食べさせたいけど先輩が…」とか。
- ・ 職員が時間的に余裕がない。何かを追加するのは現場ではきつい。
- ・ 明らかに全然食べていないのに長生きしている人もいる。その人その人の本当に必要な量ってどうなのか。元々食事量が少ない人で「栄養量が少ない」と言われるが、そもそも食べない人なので…
- ・ 本当に 100 近い人…体も小さいし枯れている。そんなに食べなくても生きていけるのでは。
- ・ 食事量落ちた時に他のことも重なっている？ うつ、不眠、精神疾患が隠れている場合も？ トイレのバランスとか。かゆいとか。食欲以外にも何かしらストレスがある。
- ・ 入所の段階で終末期に医療処置をどこまでやるかは確認する。病院に行くか、人工呼吸器どうするか、心臓マッサージどうするか。しかし「食事を食べさせますか？」というのではない。
- ・ 「食べなくなったらやめます？ だましまし食べさせますか？」とは家族に言えない。伝わらない。

<論点まとめ>

- ・ 一人ひとりにすごく向き合っている栄養士。すごい。とても感動した。以前施設に勤めていた時はメニュー作って運んでくれている人というイメージだった。
- ・ 周りがすごく頑張るけど本人は本当にそれが幸せなのかなと思う。できればそうなる前に本人の意見を聞けると良い。周りだけ頑張っていて、私だったら「死なせてくれよ」というときもある。
- ・ 「こっちのエゴなのかな…」頑張って食支援して予後延ばせたら延ばせたで思う。
- ・ 医療は「自分だったら受けたくないけど、家族は受けさせたい」。食事も同じかも。ダブルスタンダード。

<次回予定>

日 時：2019 年 12 月 16 日（月）19 時 30 分～

場 所：ふれあい歯科ごとう

発表者：余郷 麻希子

以 上